

すげ〜べ會空 新聞

会津木綿に 新たな可能性

7月31日、会津木綿を使った小物づくりをしているグループ「會空(あいくう)」取材した。

2011年の東日本大震災と東京電力福島第1原発事故の影響で会津に避難した女性たちで作る。

代表の庄子ヤウ子さん(71)は、避難先で偶然再会した仲間たちと12年に始めた。生きがいづくりがき

ぬいぐるみ、ストラップ

「会津への恩返し」

「會空」の名前の由来は、活動する会津への感謝の気持ちを込め

るとともに、ふるさと大熊町と会津の空は続いている。世界中に、どこま

でも広がっている。そして未来へもつながっているという意味を込めた。

④会津木綿人形の「あいくー」について説明する庄子さん
⑤つぶらな瞳でかわいい「あいくー」。大熊町の桜をイメージした桜しまのバンダナがオシャレ



カラフルな印象の会津木綿。いろんな色や模様があって、人形の表情や雰囲気違って見える。取材の時は、熱心に話を聞いて、メモを取ったよ

⑥木綿玉作りの体験。最初は簡単そうに見えたけど意外と難しかった！
⑦完成した木綿玉ストラップ



木綿玉つくったよ！

木綿玉ストラップは、「會空」のオリジナル商品だ。鮮やかな色の組み合わせが特徴で、会津木綿の良さを引き出している。



未来へ自ら歩む

「何でもやればできる。動かなければ、誰も助けてはくれない」。これは庄子さんが未来を生きる私達に送ってくれた言葉だ。

庄子さんたちは、もし大熊に帰れたとしても、会津木綿の小物を作り続けていきたいと決意を示した。

「あいくー」は会津木綿で作ったクマのぬいぐるみ。バンダナがアクセント。つぶらな瞳で口がないのが特徴だ。庄子さんは「口がないからこそその人の表情に寄り添うことができる」と話す。大熊町のキャラクター「おおちゃん・くうちやん」をモデルにデザインされている。

庄子さんは、「大熊には海も、フルーツもある。海の人たちは気性が荒いと言われけど、大熊の人たちは皆優しい。大熊での思い出は語りつくせない。だから帰れるなら帰りたい。でも私は単なる被災者で終わらたくない」と語った。そんな熱い思いが彼女の周りの人々を動かしたのだ。大熊町の桜をイメージした桜

しまを企画するなど、ふるさとへの思いは強い。



会津木綿広め隊

- 星 健斗 (ザペリオ高1年)
- 永山 亜湖 (滝根中1年)
- 七島 海希 (福島大付小6年)
- 長谷川知輝 (御山小6年)
- 長谷川一茶 (湊小6年)
- 渡邊幸和子 (小金井小5年)

私たちが
作りました